

「この私が自ら教えたんどす。はるの作法に不安な  
んかありまへん。ただ：」

「：ただ？」

鸚鵡返しに聞き返すと、トキは目を眇めてにんま  
りと笑う。ぎくりと息を詰めた俺を面白そうに見な  
がらすつくと立ち上がると、端に控えていた女中が  
音もなく襖を開ける。

「トキ！」

答えぬまま部屋を出ようとするトキに、俺は思わ  
ず尖った声を掛ける。

そんな俺を目を細めて見やると、トキは洗練され  
た仕草で口元を覆った。

「それは明日のお楽しみということどす。あんさん  
も過ごさんうちにはよ休みよし。オホホホホ」

呆氣に取られた俺を置き去りにして、さやさやと  
足音が遠ざかっていく。

一人部屋に残された俺はトキの楽しそうな笑い声  
が耳に残って、もやりと苛ついた。

「くそ……！」

思わず持っていた猪口を膳に叩きつけそうになっ  
て……なんとか堪えた。

さすがに他家の備品を無闇に壊すわけにはいかな  
い。それが例え血縁の家であつても。

行き場を失った苛立ちに俺は眉を強く寄せ、吐き  
出すように呟く。

「：それが企んでるというのだ。トキめ：」

たかが女二人にこの俺が翻弄されるとは一体何事  
だ！

（だが、ならば明日何が起こつても絶対に俺は驚い  
てはやらぬぞ！）

手の内を知らなくても、心積もりは出来る。

そう思つて、俺はようやく溜飲を下げて今夜最後  
の酒を呷った。

翌日。

青く晴れ渡った空に時折薄い雲が流れていく、爽  
やかな良い朝だ。

昼になればまた変わるのだろうが、この気温なら  
単衣でも暑くはないだろう。

昼前から始まる茶会に合わせて少し遅めの朝餉を  
取る。

今日の茶会は通常のものとは違い、大勢の客が参  
加する。

本条院家秘蔵の茶道具を披露するのが目的である